# 柿生文化

平成２３年１１月１８日
柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生6-40-1柿生中学校内
電話：044-988-0004（柿生中学校）
第４２号


発掘！郷土の伝統文化

## 約400年間継承、上麻生の「秋葉講」

日本全国には古くから継承されてきた祭や講、あるいは芸能がたくさん残っていますが、最近では都市化や世代交代などを契機としてそれらの無形文化財が消滅してしまうという残念な事態が発生しております。

そんな中、柿生の浄慶寺の秋葉神社（秋葉神社は神仏習合のなごりで昔から浄慶寺の持ち分となっている）では、浄慶寺創建の江戸時代初期から現在まで「秋葉講」が継承されています。

（浄慶寺境内にある秋葉神社全景）

１０月１７日(日)、午後３時頃より「講」の当番の方が準備をされ、夕刻６時近くになると「講中（こうじゅう＝講のメンバー）」の方々約２０名ほどが浄慶寺に集合、６時には浄慶寺住職と伝通院僧侶を先頭に小高い場所にある秋葉神社に登り、社に到着。住職を中心に本殿ご神体に向かい、皆さん住職の般若心経の読経に手を合わせていらっしゃいました。

その後、ご住職の法話を聞き、神社での儀式が終了します。下山後は寺で全員で食事をとりながら１時間ほど歓談されました。

（住職の先導で階段を登る講中の方々）

ここの「秋葉講」は「お日待ち（おひまち）」でもあります。「お日待ち」とは本来、風呂に入り、精進潔斎（しょうじんけっさい＝肉食を断ち、心身を清めて行いを慎むこと）して夕刻から次の日の朝方まで眠らずに籠もり明かし、日の出を待ち、食べ物も精進料理を原則としているものですが、現在は夜８時頃でお開きとなります。

浄慶寺は、元和元年（1615年）に麻生の領主の三井左衛門尉（みついさえもんのじょう）が父の菩提を弔って創建したものといわれ、その時に、かつての故郷であった遠江国（とおとうみのくに＝現在の静岡県西部）の秋葉神社を勧請（神仏を分霊してまつること）し、境内に秋葉神社を建立しました。

秋葉神社は三尺坊大権現を祀っており、徳川家康も強く信仰していたといわれます。三尺坊とは修験者（仏教の一派で日本古来の山岳信仰の修業者）で、空を飛び、火を鎮める秘法を体得していたそうです。

浄慶寺創建当時から「秋葉講」があったとすると何と約４００年間続いているわけです。柿生にはこんな貴重な文化が残されていたのです。

（社殿において住職の法話を聴く）

## 川崎にこんな遺跡があった

# ご存じでしたか?日本初のサーキット場「多摩スピードウェー」

### 多摩川河川敷にあった幻のレース場

川崎市中原区、東横線の鉄橋横の多摩川河川敷に日本初の常設のサーキット場があったのをご存じでしょうか。

１９３６年(昭和11年)開業、１周１２００メートルのコースと多摩川の堤防土手を利用したメインスタンドをもち、収容人員約３万名、現在でもその名残りを残すメインスタンドの収容人員は数千人というかなりの規模でした。

（スピードウェーの観覧席跡）

この年、５月７日には日本で初めての第１回全国自動車競争大会が開催され、全く無名のオオタ自動車が手作りで製作した「オオタ号」が優勝しました。このレースには、後に本田技研工業を創設した本田宗一郎氏が自家製の「浜松号」で参戦しましたが残念ながら事故により負傷し途中棄権してしまいました。

やがて日中戦争の長期化に伴って自動車レース自体が縮小し１９３７年(昭和12年)５月１６日を最後に、わずか約１年間の歴史を閉じてしまいました。(1939年までに計6回行なわれたという説もあります。)

一方、オートバイのレースは、第２次世界大戦開戦後も開催されていましたが、やがては消滅してしまいました。しかし、戦争後、ガソリンが手に入るようになりますとオートバイのレースも復活し、しばらくの間使用されていたようです。

やがて、ここを公営競技場として使用する計画がもちあがり、１９４９年(昭和24年)日本小型自動車競争会が主催して「全日本モーターサイクル選手権」が開催されました。結果としては河川敷における水害の危険性や地理的な条件等から続けることはありませんでした。レース場としては、いつ頃完全に廃止されたかについては正確なところは分かっていません。

現在は、コースの位置には日本ハム球団の多摩川グランドが造成されていまます。コンクリート製のメインスタンドは今でも土手の側面にそのまま階段状に残っており、ベンチの支柱を埋めた穴もコンクリートの中にそのまま残っています。

（かつてのレーシングコース二上方に多摩川と東横線鉄橋を望む）

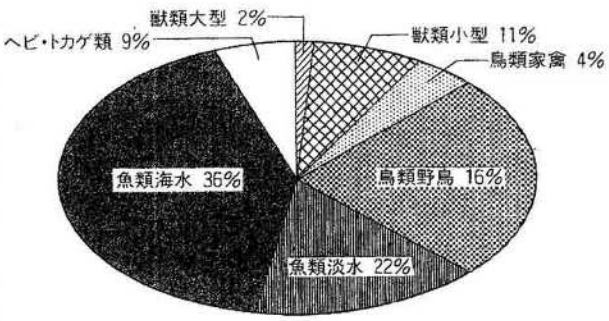
（「多摩川スピードウェーの位置」：平成17年国土地理院25000分1地形図）

## 大地震の前兆現象を探るⅢ

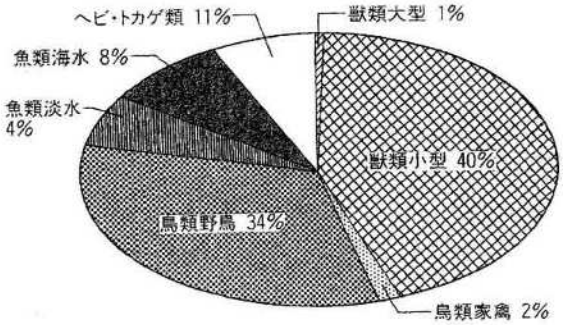
# 近くの自然環境にこんな変化はないか！

前回４１号には、主な大地震でみられた前兆現象について、特にナマズの異常行動についてあげ、柿生においても観測されたということなどを考えてみました。

今回は、平成７年１月発生の阪神淡路大震災でのアンケート調査にもとづいて、動物の異常行動について種類別に考えてみました。




（日本の歴史上の大地震に見る動物異常の割合：「大地震の前兆現象」より）




（阪神淡路大震災に見る動物異常の割合：「大地震の前兆現象」より）

上記のグラフを見ると獣類・鳥類・魚類などの異常行動の割合が高いことが分かります。

獣類の特徴的な異常行動についてあげると**ネコは姿を消し**、地震後戻ってくるというケースが多く、また、**ネズミは大暴れをはじめたり姿を消してしま**う。一方、**犬は吠え続ける**という行動が多く報告されています。

次に鳥類はどうでしょうか。鳥類はなんといっても**カラスに関する報告が多い**ようです。例えば大群になって鳴き叫び、やがて他の地域へ飛び立ってしまうというケースが多いようで、**スズメやムクドリ**も同じような行動をとっているようです。

魚類は、ナマズに関する報告が多数見られますが、ナマズ以外でもイカが大量に捕獲されたという報告がかなり多数あげられます。

その他の動植物については、**カメ・ヘビ・カエルなどが真冬に冬眠から起きだしたりミミズが異常発生**し、地上に出てくる等という現象も多く発生しています。

以上の現象は阪神淡路大震災のみに限らず、安政大地震や関東大震災においてもほぼ同一の異常行動が見られたのです。これらのことをもとに動物の異常行動を考えると全体的に動物が、人間には感知できない何かを敏感に感じ取り、なんらかのストレスを本能的に感じとって不安定な行動をとったものと思われます。そして、そのストレスからの忌避行動としてネコやカラスが突然居なくなるわけです。確かに逆に震源から離れた地域では鳥類が他の地域から集合してくるなどの状況も見られました。これは明らかにストレスからの忌避行動としか考えられません。それは大変事が起こるという「予感」というよりは大変事発生前に何らかのストレスになるものが発生しているということも考えられるのではないでしょうか。次回は動物達が感じ取っている「ストレス」について考えてみたいと思います。

（参考資料：「大地震の前兆現象」「前兆証言1519」）

第３０回カルチャーセミナー（１０／２２）報告

# 鎌倉時代の郷土の姿が浮き彫りに

１０月２２日、「中世の柿生・岡上」をテーマとして中西望介先生をお迎えしてカルチャーセミナーが開催されました。特に鶴見川流域の歴史を「吾妻鏡」の記述をもとに鴨志田氏、小山田氏、平太氏、細山氏、稲毛氏などの中小武士団と、秩父氏、横山氏、等の大武士団との対立関係や鎌倉幕府との関係などを詳しく講義して下さいました。

（講演される中西望介氏）

## 柿生郷土史料館開館のご案内

**開館時間**

**開館：午前１０時**
**閉館：午後　３時**

| | | | |
|---|---|---|---|
| １１月　６日(日) | 特別展解説11:00~ | １２月　３日(土) | 特別展解説11:00~ |
| １１月１３日(日) | 特別展解説14:00~ | １２月１０日(土) | 特別展解説14:00~ |
| １１月２０日(日) | 特別展解説11:00~ | １２月１７日(土) | カルチャS14:00~ |
| １１月２７日(日) | 農作業実演14:00~ | １２月２４日(土) | 特別展解説11:00~ |

## 柿生郷土史料館の11・12月の催物

（特別企画展）　　※　お問い合わせ　９８８－０００４（柿生中学校）

### 第４回 特 別 企 画 展

■テーマ　「郷土の古民具と信仰展」 ― 農事・生活と信仰の姿 ―

*大好評！多数の見学者が来館*

■期　日　１１月（日曜日）・１２月（土曜日）

※柿生文化41号4ページ特別企画展のご案内で郷土史料館開館曜日が違っていました。左のものが正しいです。申し訳ありませんでした。

（セミナー）

### 企画展対応セミナー

「昔の農作業実演と体験（千歯こき・唐箕を使用）」

■期　日　１１月２７日（日）午後２時より　　■場　所　柿生郷土史料館

### 柿生郷土史料館 第３１回 カルチャーセミナー

■テーマ　「柳田国男の世界～共に歩んだ時代を語る～」

―― 柳田のよき理解者が語る多摩・麻生の魅力 ――

■講　師　箕輪　敏行　氏
■日　時　１２月１７日（土）１４：００～
■会　場　柿生郷土史料館